越谷市郷土研究会

第４２２回史跡めぐり

平成２４年１月３日（火）

『亀戸七福神めぐり』

―越谷とのつながりを探そう―

第４２２回　史跡めぐり **亀戸七福神めぐり**

・越谷の船渡で制作された張子が、亀戸天神の門前で売られていた。
・亀戸七福神の一つ、香取神社は、越谷地域にもあって、ともに下総国葛飾郡の名残。
・亀戸不動尊は、大相模不動尊（大聖寺）と同じ言い伝え（後述）が残る。
・江戸六阿弥陀めぐりの１つが亀戸にあるが、越谷周辺でも真似して新六阿弥陀めぐりが行われた。

日　　時　平成２４年１月３日（火）
集合場所　越谷駅西口　８：３０集合（１３時、現地解散）８：４２　区間急行浅草行（曳舟駅経由）
コース（４．２キロメートル）

※囲まれた□の場所は、立ち寄って説明するところ、その他は通過します。

※亀戸天神は立ち寄りませんので、あらかじめご了承ください。

越谷駅（エレベーター辺りで乗車）→曳舟駅→亀戸駅→１・亀戸十三間通り（明治通り）→２・横十間堀→３亀戸銭座跡碑→４・日清紡績創業の地→５・亀戸天神通り（蔵前通り）→６・船橋屋（くずもち）→７・亀戸張子（船渡の張子）→８・亀戸天神→９・亀戸花街跡→10 龍眼寺（萩寺・布袋）→11 天祖神社（砂原神明社、福禄寿）→12 普門院（毘沙門天）→13 亀島の香取神社（恵比寿・大国神[大黒天に相当]）→14 東覚寺（亀戸不動・弁財天）→15 常光寺（寿老人）→16 亀戸水神（水神の森）→亀戸水神駅（１２：３０解散）※亀戸水神駅～越谷駅は３５０円

亀戸は、昔、小さな島であった。その形が亀に似ているところから亀島、亀津島と呼ばれていた。その後、周りの島々と陸続きになり、いつのころからか亀戸と呼ばれるようになったという。亀戸の「ド」とは、港という意味からきているのであろうか（加藤私見）。

亀戸七福神は、戦前から盛んに行われていたが、太平洋戦争の戦災に遭って一時中断、昭和５３年（１９７８）に復活した。

右は、亀島の香取神社作成の「香取神社御由緒記」より抜粋した。

亀戸は昔小さな島からなっており、初め亀島又は亀津島とも呼ばれ、島の形があたかも亀に似ているところからそのように名付けられた。現在この附近の土地には北に向島・牛島、南に大島、西に柳島等島にちなんだ名が多く、葦の海辺が次第に堆積して島となり、村落を形成して漁村となり、さらにはこれらの島々も四辺陸続きとなって、亀島は亀村と称され、耕地と遷り変っていきました。

江戸名所図會にも

香取大神宮　此地も昔は泰平城に等しく海にして一つの離島なり亀の浮べるに似たりとて舊名を亀津島と唱へたりといふ云々

と記されております。

後に臥龍梅庭内にある亀ケ井と混同され、亀井戸と呼ぶようになったという説と亀津の津は戸の字義に同じであり、亀津を亀戸といった国語上の解釈との説がある。

１．十三間通り　　＝十三軒がいつしか十三間に変化

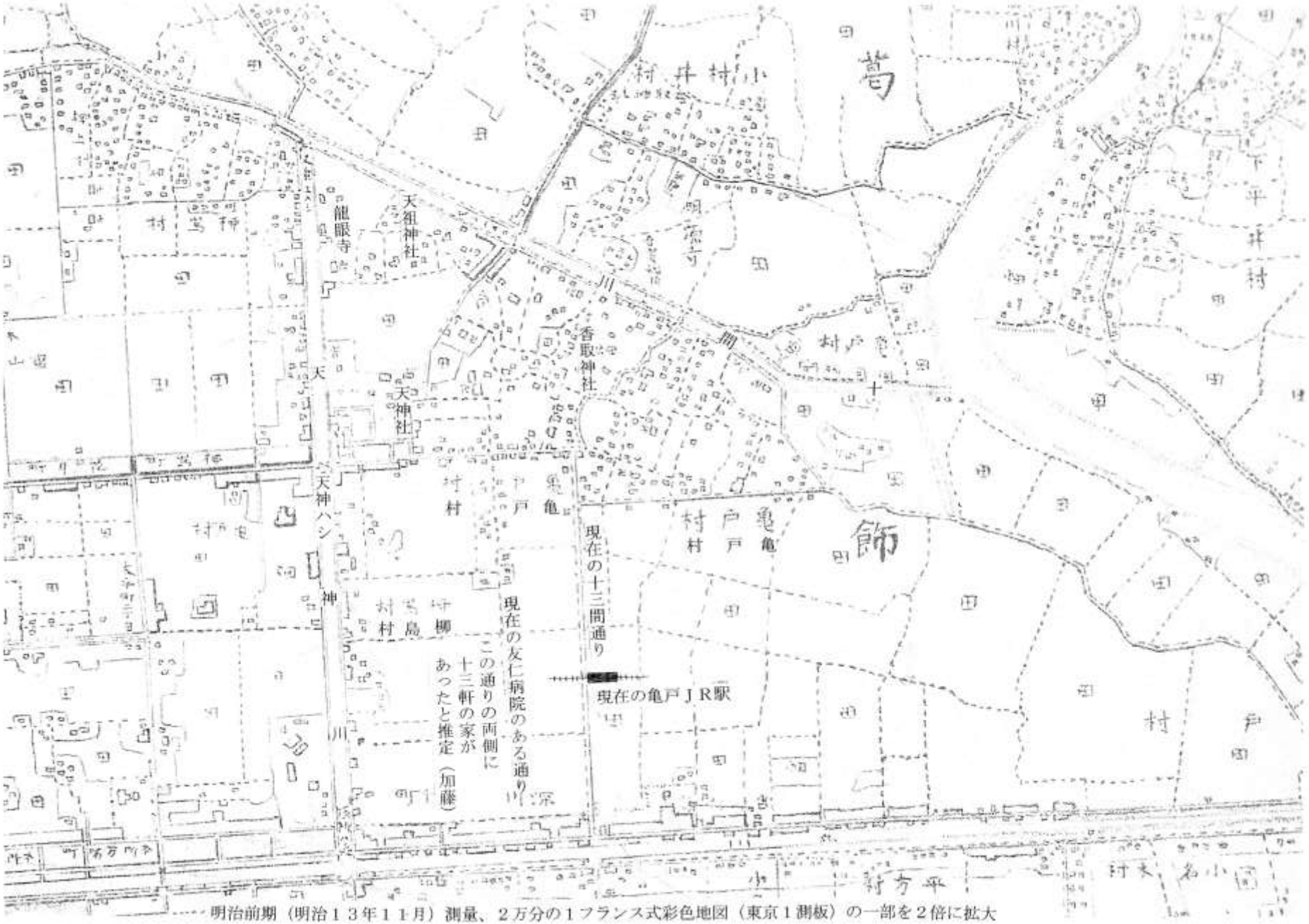
田んぼや蓮田の田園風景が見られた明治の頃、このあたりに家が十三軒あったといわれ、それが後世に誤まって十三間と書かれ、今日の十三間通りの通り名に採用されたのが真相のようである。

江戸時代からある南北の通りが、この十三間通り（明治通り）と友仁病院やコンビニａｍのある通りである。明治の迅速図から十三軒は友仁病院あたりの通りの両側にあったと思われる（加藤推定）。

２．横十間堀（よこじっけんぼり）

＝江戸城から見て横に流れる幅十間の堀

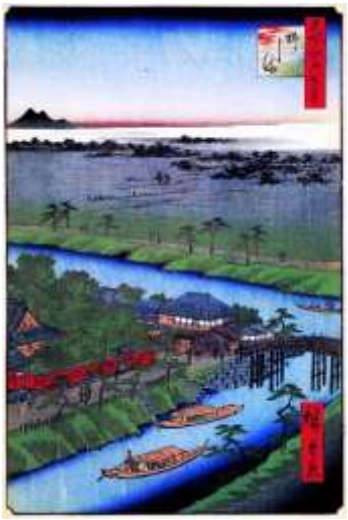
江戸城からみると、この十間幅の堀は横（南北）に流れて見られるので、横十間堀と呼ばれた。「天神川」とも呼ばれた。



明治前期（明治１３年１１月）測量、２万分の１フランス式彩色地図（東京１測板）の一部を２倍に拡大

※広重『名所江戸百景』「柳しま」（柳島）

絵の中央の川が北十間川、絵の下の川が横十間川、左上の山は筑波山。隅田川を目指して北十間川を左手へ１キロほど行くと、中央右手に見える猪牙船の位置へやってくる。南北に走る横十間川との合流点で、その手前、画面右手に架かる橋が、柳島橋である。これらの掘割は、その幅が１０間であることから、十間川として知られている。



ここで断然有名なものは、日蓮宗法性寺の境内にある妙見堂で、北斗七星の神格化した北辰妙見大菩薩を本尊として祀る大きな建物が、左端の木のなかに見えかくれしている。「妙見さま」は、江戸ではとりわけ芸人たちに広く信仰され、寺はその信仰の中心であった。信者として有名なのが、浮世絵師の北斎で、「北の絵師」という意味の画号の北斎も、そこからとって付けたと言われている。

有名なもののもう１つは、料理屋の橋本である。画面中央に大きく描かれている建物が、それである。明るい障子の窓が招いているようだ。橋本は、大正十二（１９２３）年の震災で倒壊した。遠景には、墨を散らした淡い色彩で、美しい田園風景が広がっている。草色の田んぼは墨線で縁どられ、村の家々が木立に包まれている。彼方には、筑波山が霞んで見える。江戸の人間にとっては、おなじみの姿である（この絵では、男体山が実際よりずっと西の方に高く描かれている）。　（ヘンリー・スミス『名所江戸百景』）（app.f.m-cocolog.jp/t/typecast/29509/29019/16020304 を元に改編）

３．亀戸銭座跡＝江戸時代ここに銭（寛永通宝）をつくる銭座があった

寛永通宝一文銭のモニュメントの碑があり、そこには以下の解説文が刻まれている。

「この付近に幕府の鋳銭所がおかれ亀戸銭座と称し寛文八年から明和六年まで各種の寛永通寶銭を鋳造しその銭のおもてには寛永通寶うらには文の字のあるものや二十一本または十一本の波模様のあるものなどがある。

昭和三十三年十月一日江東区第十三号」

「銭座で行われている銅貨製造工程のうち、平研（ひらとぎ・銭の表面を磨く）の作業をしている図。銭座絵巻より（享保１３年／１７２８作）」

なお、その他の銭座跡として知られているのが小菅銭座で、現在の東京拘置所の南側の葛飾区立西小菅小学校あたりにあった。

４．日清紡績創業の地＝日清紡の工場跡

日清紡績株式会社は明治四十年一月創立後、東京府南葛飾郡亀戸町の当敷地二万余坪に、最新鋭設備を誇る本社工場を建設した。

最盛時には、紡機一〇七、八〇〇錘、織機三六〇台を擁した本工場は、昭和十六年軍の要請により陸軍被服本廠が使用するに至るまで、四十五年に亘り主力工場として綿糸布を生産し、広く内外の需要に応えると共に、幾多の人材を輩出した。

この間明治四十三年、大正六年、昭和十三年の三たび横十間川の洪水で浸水し、大正十二年には関東

大震災に遭ったが、従業員の献身的努力によりこの職場を守り得た。

昭和二十年大戦下の空襲により焦土と化したが、運動場として整備し主として勤労青少年の体育に寄与してきた。偶々昭和四十二年東京都浄水場、日本住宅公団用地として提供するに至り、当社の手を離れた。

今般この地に記念碑を建立し会社創業関係者の遺徳と、生死苦楽を共にした多数従業員各位の功績を偲ぶものである。　　日清紡績株式会社　昭和四十六年五月　建之

５．天神通り＝亀戸天神のかつての門前町

道幅が広がっていて、台東区蔵前や蔵前橋を通る蔵前通りの一部となっているが、戦前までは、亀戸天神の門前町を成していたと思われる。

天神通りの歩道には、参拝客を迎えるように「ウソ」のモニュメントが続いて見られている。

６．船橋屋＝江戸時代から続く「くずもち」の店

亀戸天神の１２０軒の店があった門前町は、戦災で全滅した。その後、元の場所に戻ってきたのは３軒程であった。その１つが亀戸名物「くずもち」の船橋屋である。

発祥は文化２年（１８０５）で、初代が船橋からやってきた。そのために船橋屋と名付けられた。

この店内に、吉川英治筆の「船橋屋　英治筆」(昭和２９年正月）と書かれた看板が掛けられている。

７．亀戸天神と越谷市の船渡の亀戸張子＝船渡で制作された首振り張子や吊るし張子

船渡の張り子は、古くから越谷の船渡（ふなと）一八九〇の松崎家で農閑期に作られていました。以前は、東京の亀戸天神の土産物「亀戸張子」として、首振りや吊るしのものが境内の外で戸板に並べられて売られていました。ユーモラスな表情が人々の好みにあって喜ばれていました。

亀戸天神の郷土玩具「うそ」は今でも境内で売られていますが、張り子は境内での販売は許されませんでした。松崎久男氏によって細々と作り続けられましたが、娘が病を患い、亡くなる平成十七年頃になると作られなくなりました。

藤娘

一本足傘

蛸三番（さんば）

獅子舞

和藤内

福山市の「日本郷土玩具博物館」の展示より（撮影：加藤）

船渡の亀戸張子の販売の天満屋

船渡の亀戸張子販売ケース

天満屋で販売されていた張子の虎

亀戸張子（船渡張子）を販売していた土佐謹一商店は、参道に入って左側（現在の「江戸そば」店のあたり）にあったお土産屋さんのようですが、昭和４０年代にはすでに廃業したようです。

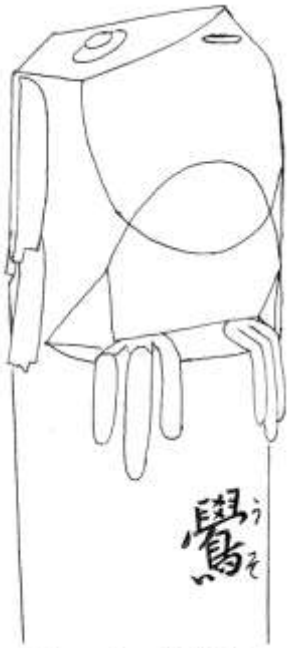
亀戸張子（船渡の張子）を売っている店は、蔵前通りの天神側に面した「天満屋」のみと思われます。天満屋で販売される亀戸張子（船渡の張子）は、自らバイクで越谷の松崎様までわざわざ行って仕入れたそうです。私が調査した平成２３年１２月２３日の午後の時点では、店頭には首振りの張子の虎のみが三つしか残っていませんでした。一つ購入（1,200 円）しましたので、二つとなり、船渡の張子の完売も時間の問題です。船渡の張子は既に作られていませんので、完売すれば、もう手に入らなくなると思います。（加藤幸一）

8. 亀戸天神＝「うそかえ」で有名

①亀戸天神の由来

由来「江戸時代から学問の神様として信仰を集め、梅や藤の名所として庶民から親しまれてきました。寛文２年（１６６２）九州大宰府天満宮の神職が、飛梅の木で菅原道真の像を作り、祀ったのが創建といわれています。毎年１月２４日、２５日に『うそ替え神事』が行われ、前年のウソ※を納め、新しいウソを求めると『凶もウソとなり吉にトリ替わる』といわれており、桧の一刀彫のウソに人気があり、たくさんの人々で賑わっています。」（解説板より）

※「ウソ」とは、鳥の「鷽」（うそ）とウソつきの「嘘」の両方に掛けている。



スケッチ：加藤幸一

境内にあるモニュメント

また、一説に（昭和５０年１２月２９日の読売新聞・都民板「ストリーストリート」よる）、正保３年（１６４６）、太宰府天満宮の神職大鳥居信祐が江戸に来て、亀戸村（現在の亀戸五丁目）に天神社を創立、寛文３年（１６６３）に現在地（亀戸三丁目）に移転したが、神殿・心字池・橋など、すべてを太宰府天満宮に模して造営し、当初の鎮守となった。延享２年（１７４５）、付近の人家からの火で全焼し、七年後に再建開帳。戦災でもすべて焼失したが、現在はほぼ旧態に。

②うそ替え神事（うそかえしんじ）

「うそ」は幸運を招く鳥とされ、毎年新しいうそ鳥に替えるとこれまでの悪い事が「うそ」になり一

年の吉兆（きっちょう）を招き開運・出世・幸運を得ることができると信仰されてきました。江戸時代には、多くの人が集まりうそ鳥を交換する習わしがありましたが、現在は神社に納めし新しいうそ鳥と取り替えるようになり、１月２４・２５日両日は多くのうそ替えの参拝者で賑わいます。うそ鳥は、日本海沿岸に生息するスズメ科の鳥で、太宰府天満宮のお祭りの時、害虫を駆除したことで天神様とご縁があります。又、鷽（うそ）の字が學（がく）の字に似てることから、学問の神様である天神様とのつながりが深いと考えられています。亀戸天神社の「うそ鳥」は、桧で神職の手で一体一体心を込めて作られ、この日にしか手に入らない貴重な開運のお守りとしてとても人気があります。

うそのモニュメントのある碑には以下の文章が刻まれている。

「鷽の縁起　筑前の太宰府天満宮御やしろに毎年正月七日うそかへと云う事あり四方の里人木のえだ其ほかのものをもてうそとりの形をつくり持きたり　神前において互にとりかへてその年の吉兆をまねくことになん是やいまゝでのあしきもうそとなり吉に鳥かへんとのこゝろにてうそかへといふ元より此おん神の託（つげ）によりて始れり直き心をもてすれば誠のみちに叶べしこゝに亀戸天神社はつくしのうつしなれば文政三年この事を始めて毎年正月廿四日五日うそ鳥の形をつくり境内においてうらしむれば信心の人々はかひ求めて神前にあると鳥かへなばかけまくも賢き神の御心にもかなひ開運出世幸福を得べきになり」（解読：加藤幸一）

③「うそかえ」の裏話

昭和５０年１２月２９日の読売新聞・都民板「ストリーストリート」によると、「記録によると、『明治１２年（１８７９）、うそかえ、このころから人気が衰える』とある。元凶はスリ。当時、うそかえは、参拝者がお互いに、和服のたもとに入れた同社製の木彫りの『うそどり』を取り替え合って、一年の吉兆を願っていた。これに便乗してスリが横行。『うそかえましょう』とどなりながら、財布をかすめとったわけだ。取り締まりに手を焼いた警察が、あっさりこの行事の禁止令を出し、ために大江戸名物ののどかな正月風景は姿を消したのである。『うそ』が息を吹き返したのは四十年ごろから。それも、取り替え合うのではなく、受験地獄で、『うそ』が合格の吉兆を招く、と受験生のマスコットになり、ブームを呼んだ。当時、売り出されたのは六千五百本程度。これが一万本を突破したのが四十六年。」

④天神様と牛

御神牛「天神様・菅原道真公は、承和十二年（八四五）「乙丑の年」の六月二十五日にお生まれになり、延喜三年（九〇三）二月二十五日に大宰府の配所でお亡くなりになりました。葬送の列が進む中、御遺体を乗せた車を曳く黒牛が臥して動かなくなり、これは道真公の御心によることと、その場所を墓所と定められました。その後、そこに社殿を建立し、御霊をお祀りしたのが太宰府天満宮の起源で、この年も「乙丑の年」でした。よって危難から救われたという故事も伝えられています。このように道真公と牛との御神縁は殊の外深く古来より信仰されて来ました。」（解説板より）

9. 亀戸花街跡

戦前、亀戸天神裏の田んぼ地にできたのが、私設遊郭「亀戸カフェー街」。昭和四、五年ごろには娼婦の数は約千人。三十三年の売春防止法施行前でも約五百人はいた。洲崎遊郭が主に軍人相手だったのに対し、ここは工員が主な客。「東京で一番安かった」とも。（亀戸は工場労働者の町でもあった）

10. 龍眼寺（りゅうげんじ、萩寺・布袋）

①江戸時代初期の**三猿庚申塔**

庚申塔は庚申信仰という民間信仰に基づいて建てられたものです。庚申信仰とは、人の体内に三尸（さんし）という虫が棲んでおり、六十日ごとにめぐってくる庚申の夜、人々が眠っている間に体から抜け出して天に昇り、天帝にその人の罪を訴えるので寿命を縮めるといわれ、この夜は眠らず過ごし健康と長寿を願うというものです。

本庚申塔は万治二年（一六五九）の銘をもち、庚申塔の中でも比較的早い段階に属し、区内では最古のものです。正面上部に三つの種子（しゅじ）※が刻まれ、その下に三猿（見ざる・言わざる・聞かざる）が並んでいます。銘文は三猿の下にあり、姓を持つ十組の夫婦が現世と来世の二世安楽を願って奉納したことが分かります。　（解説板より）

※種子（しゅじ）とは、それぞれの仏様を梵字１字で表わすものである。

向かって左から、「キャ」（十一面観音）、「バク」（お釈迦様）、「キリーク」（阿弥陀様）を表わしている（加藤）。解説板では、「ヴァン」、「バン」、「キリク」となっているが、「キリク」以外は誤りである。

※また、造立者のうち、「長谷河□右衛門」は、「長谷河小左衛門」と読めます。

②龍眼寺

龍眼寺は、江戸時代の中ごろにたくさんの萩が植えられたことから萩寺の名で親しまれ、萩の季節には多くの人々で賑わいました。このあたりは江戸時代には柳島（やなぎしま）村に含まれ、庚申塔が建てられた万治二年は、柳島村の成立した初期にあたります。代々柳島村の村役人をつとめた大沢八郎右衛門と同じ姓を持つ人名が刻銘に見られることから、奉納者は柳島村の草分け的な存在であったと考えられます。また、女性が加わっていることもこの時期の庚申塔としては珍しく、大きな特徴といえます。

平成二十年三月　江東区教育委員会

③別名、萩寺

横十間堀側の門塀に以下の句がきざまれている。

「大納言家長郷の和歌

　ききしより　見る目ぞまさる　この寺の　庭に散りしく　萩の錦は

榎本其角の句（門塀に刻まれてある句）

　つき見とも　見えず露あり　庭の萩」

また、境内には次の句が刻まれた石碑が建っている。（解読：加藤幸一）

「ひと色を　千々の錦や　萩見寺　　冬嶺」

「露の世に　こふさぬ處や　萩の上　　市町」

11. 天祖神社（砂原の神明宮、福禄寿）＝歩射（びしゃ）が今でも行われている。

①砂原の神明社

小字が砂原（すなはら）であるこのあたりは柳島村の地で、神明社（現在は天祖神社と改称）は柳島

村の鎮守であった。古老は今でも改称前の「神明さま」と呼んでいる。「天祖」とは、天皇の先祖である天照大神（あまてらすおおみかみ）をさす。関東大震災がきっかけで日本初の防災建築となったという。

②子供歩射（びしゃ）

天正年間（１５７３～９１）疫病が大流行したとき、織田信長の使者がやってきて、この神社で流鏑馬の行事を行ったところ、たちまちおさまったとの逸話があり、古くから流鏑馬の行事が行われたいたことがうかがわれる。地元では立ったままで的に向けて矢を放つ行事である「歩射（びしゃ）」が流鏑馬の名残として続けられてきている。毎年９月１６日の「本殿祭」（ほんでんさい）に子供歩射（びしゃ）として催され（現在では、９月１６日の前後の土日のどちらか）、拝殿向かって右わきには「流鏑馬場」と称する場所が確保されていて、そこで行われる。昔は、かつての参道が流鏑馬場であったのであろう。

越谷でも見られる北川崎の御歩射（おびしゃ）は、１月１１日に川崎神社（香取社）で行われる。

12. 普門院（毘沙門天）＝寺の鐘を隅田川に落したという「鐘ヶ淵」の地名の由来となった寺

①鐘ヶ淵伝説

普門院は真言宗の名刹で、福聚山善應寺と号します。大永２年（１５２２）、三股（隅田川・荒川・綾瀬川が落ち合うあたり、現・足立区千住）城中に創建され、元和２年（１６１６）に現在地に移りました。その時、誤って梵鐘を隅田川に沈め、鐘ヶ淵（墨田区）の地名の由来になったといわれています。

※武州三股城は、昭和９年まで足立区千住の一部に属していた、現在の墨田区鐘ヶ淵辺りにあったと推定。武州三股城の隅田川の対岸の南方には石浜城（南千住三丁目の石浜神社周辺との説有り）があった。

※鐘ヶ淵の伝説としては、隅田川の対岸の浅草に普門院があり、亀戸の現在地に移転する時、鐘を舟で運んだが、その際に鐘を深い水の中に沈んでしまったとの説もあり。

②伊藤左千夫之墓

墓地入口をはいって、右方に伊藤左千夫の墓がある。墓石の伊藤の「藤」の草冠は「十十」、「水」は、「糸」として、異体字で刻まれている。

なお、境内に入ると、正面が本堂があるが、その本堂の屋根の上には、スカイツリーの先端が屋根から飛び出ているように見られる。

《三猿庚申塔》寛文８年（１６６８）造立の三猿が正面と両側に刻まれた江戸初期の貴重な庚申塔である。正面の上部には日月が刻まれ、中央には「奉造立庚申結衆二世安楽□（所）」、その両側に「寛文八戊申年　願主栄傳」「十月朔日」と刻まれている。

13. 香取神社（恵比寿・大国神）

＝かつては、千葉県にある香取神宮から続く下総国に属していた

①香取神社の地域は、かつては下総国葛飾郡に属していた。江戸時代は江戸川以西が武蔵国となる。

隅田川の木母寺より下流の東岸にあたるこのあたりは、元は下総国（しもうさのくに）葛飾郡葛西領（かさいりょう）[現在の葛飾区、江戸川区、江東区、墨田区]に属していて、江戸時代の初

期、寛永年間に下総国から武蔵国に変わったと推定されている。

下総国に分布する香取神社は、千葉県佐原市香取にある下総国の一の宮の神社「香取神宮」を分祀したものである。これら香取神社は、香取神社の本社である香取神宮から当時の足立区の古隅田川（足立区と葛飾区のかつての区境）から木母寺より下流の隅田川の東岸にかけて分布していたのである。ここは下総国の西のはずれとなる。

隅田川の上流を利根川と呼んでいたが、これが、かつての武蔵国と下総国との国境で、下総側に香取社が分布している。越谷市周辺では元荒川の以東、春日部市周辺では春日部の古隅田川の以南である。

②道祖神祭り（右写真）

ここ亀戸の香取神社には、江戸時代から明治初期にかけて、道祖神祭りが毎年正月１４日に行われ、氏子の子供たちが宝船をかつぎ、亀戸から両国の辺りまで練り歩いた。（解説板より）

③香取小学校

すぐ近くに香取小学校があるが、校名の由来は大正年間にできる時に、この香取神社から名付けたもの。なお、水神小学校も同様に大正年間に亀戸水神から名付けた学校である。地元寺社の名前を由来とする公立の学校名としては珍しい。

④天祖神社（「入りの神明宮」）

柳島にある「砂原の神明宮」（現、天祖神社に改称）に対して、ここは「入神明宮（いりのしんめいぐう）」という。ここの解説板によると、以下の通りである。

「昭和６３年の香取神社改築に伴い移転され境内神社として祀られるようになった。当神社の創立は江東区内では最も古く口伝によるとこの地が四辺海に囲まれていた頃漁船がしばしば風浪の危難に会う毎に伊勢の大神を祈念すると災害を免れたという事で太平榎塚（えのきづか）に小祠（しょうし）を営み鎮祭されたという。江戸名所図絵に書かれている神明宮は当社である。尚、境内から多量の砸（いわ）が出土（明治四十年）し考古学的にも有益な資料とみることがえきる。現在香取神社にて保管。」

※「砸」とは、「錘」のことか。

⑤亀戸大根

このあたりで大根づくりが始まったのは、記録によると文久年間（１８６１～６４）の頃とされ、当香取神社周辺が栽培の中心地で、以来、明治時代にかけて盛んに栽培されてきました。

当地は荒川水系によってできた肥沃な粘土質土壌であったため、肉質が緻密で白く冴えた肌の大根づくりに大変適していました。

亀戸大根は、根が３０㎝程度の短い大根で、先がクサビ状にとがっているのが特長。

明治の頃は「おかめ大根」とか「お多福大根」といわれましたが、大正初期に成って産地の名をつけて「亀戸大根」と呼ばれるようになりました。しかし、宅地化が進んだ大正時代の終わり頃から産地は江戸川区小岩や葛飾区高砂などに移っていきました。

秋から冬にかけてタネをまいて早春に収穫となる亀戸大根は、当時は他に大根等の全くない時期で、

新鮮な野菜の出始めの頃なので根も葉も共に浅漬けにして美味しいことから、江戸っ子から大いに重宝がられました。（解説板より）

14. 東覚寺（亀戸不動・弁財天）＝相模の国の大山寺の不動明王像と同じ木から刻んだ良弁の同木同作

①亀戸不動尊は、大相模不動尊（大聖寺）と同じ言い伝えが残る。

東覚寺は享徳４年（１５３１）玄覚法印の創建と伝えられています。（中略）当時の不動明王は、東大寺別当良弁（６８９～７７３）の作で、大山寺（神奈川県）本尊と同木同作といわれ、江戸時代より亀戸不動として信仰をあつめてきました。（「江東みちしるべ」の解説板より）

②大相模不動尊の言い伝え

大相模の不動尊は、大山の不動尊の不動明王像と同じ木で刻んだもので、大相模の方は根本（ねもと、本木）の部分であるという。

15. 常光寺（寿老人）＝江戸の六阿弥陀もうでの一つ、越谷周辺でも江戸の影響で六阿弥陀が行われた。

①「江戸六阿弥陀詣で」と常光寺

常光寺は、江戸六阿弥陀巡礼のうち、第六番目の霊場として栄え（ました。）（中略）

江戸六阿弥陀への彼岸もうでは、江戸時代の庶民の信仰と行楽として盛んに行われていました。

（「江東みちしるべ」の解説板より）

※その当時の名残である六阿弥陀道（ろくあみだみち）の道標がここに残っている。

②越谷周辺の「新六阿弥陀詣で」

越谷周辺でも、江戸六阿弥陀めぐりの影響を受けて、天明八年（一七八八）より「新六阿弥陀」として行われました。

③「江戸六阿弥陀詣で」の道標（常光寺）

江東区指定有形民俗文化財「六阿弥陀道・道標　延宝七年在銘」

本道標は江戸六阿弥陀詣での巡拝路である六阿弥陀道を示すものです。

江戸六阿弥陀詣でとは、江戸時代、春秋の彼岸に六ケ寺の阿弥陀仏を巡拝するもので、その巡拝地は順に上豊島村西福寺（北区）、下沼田村延命院（足立区）、西ケ原無量寺（北区）、田端村与楽寺（北区）、下谷広小路常楽院（調布市に移転）、亀戸村常光寺となっていました。

江戸六阿弥陀には奈良時代を発祥とする伝承がありますが、文献上の初見は明暦年間（一六五五～五八）であることから、六阿弥陀詣では明暦大火後の江戸市中拡大、江戸町方住民の定着にともなう江戸町人の行楽行動を示すものといえます。

本道標は、塔身・基礎より構成され、塔身の正面に「南無阿弥陀仏」、左面に「自是（これより）右（みぎ）六阿弥陀道（みち）」と陰刻があります。

また、右側面の刻銘から、延宝七年（一六七九）二月十五日、江戸新材木町（現中央区日本橋堀留町一丁目）の「同行（どうぎょう）六十人」により建てられたものとわかります。

本道標は、江戸六阿弥陀詣でに関する最古の道標であるとともに、区内に現存する道標としても最古

のものです。また、江戸で広まり亀戸にも札所のあった六阿弥陀信仰とその札所巡礼といった地域的特色を示すものとしても貴重な道標といえます。　　平成一五年三月　江東区教育委員会

※六阿弥陀第二番は、下沼田村の延命院が管理する阿弥陀堂（江北２－４６、清水酒店西側荒川土手付近）であったが、明治初期に延命院が廃寺になると、管理は沼田村の恵明寺（江北２丁目）に引き継がれた。さらに、大正期の荒川放水路開削工事で、河川敷地内に入ったため堂は廃止、阿弥陀仏は恵明寺に移され現在に至っている。

《丸彫りの庚申塔》

丸彫りの庚申塔としては、とても珍しい江戸時代初期の庚申塔である。春日部市備後にも丸彫り庚申塔（享保十三年、一七二八）はあるが、こちらは春日部市の文化財に指定されている。

頭部にはとぐろを巻いた蛇、顔は三眼、腕は六本で、合掌し、その他の手には、弓と矢、羂索（けんじゃく）と輪宝（りんぼう）を持っている。

台石には、「庚申」「天和三癸亥（１６８３）歳五月吉祥日」「亀戸村西帰山常光寺」などが刻まれている。台石の左右両側の側面には庚申塔にはつきものの鶏がそれぞれ刻まれている。青面金剛の本体には「住所　下総国葛飾郡」や「武州本□」「南横川」などの文字が見られ、体の両脇には、「生国長州戸板郡戸野敷村」「妻市瀬勘六娘おつる」と刻まれている。今後の調査が望まれる。

16. 亀戸水神の「水神の森」

１６世紀頃の創建といわれている。このあたりの新田開墾の際に水害から逃れるために祈願されたという。

ここに「亀戸水神の森」の碑がある。周辺はかつて森に囲まれていたことがわかる。

1938 年当時の香取宮司の記述によれば、「元来、水神森は松、杉の巨木が鬱蒼として茂り、古い農家が点々としてあって、農耕に励んでいた。日清、日露の戦役以後、急激な都市の膨張に伴って漸次民家が激増した。工場が盛んに建設されると共に、次第に樹木が枯死して、この水神の森も遂に昔の姿を失うに至った。」であるという。

ここには、次の解説が書かれている。

「日本国中水神さまと言われているお社は、恐らく数百社の多さに達するであろう。この神は普通一口に水神さまと呼ばれている。そのほんとうの神名を知っている人は少ないと思う。

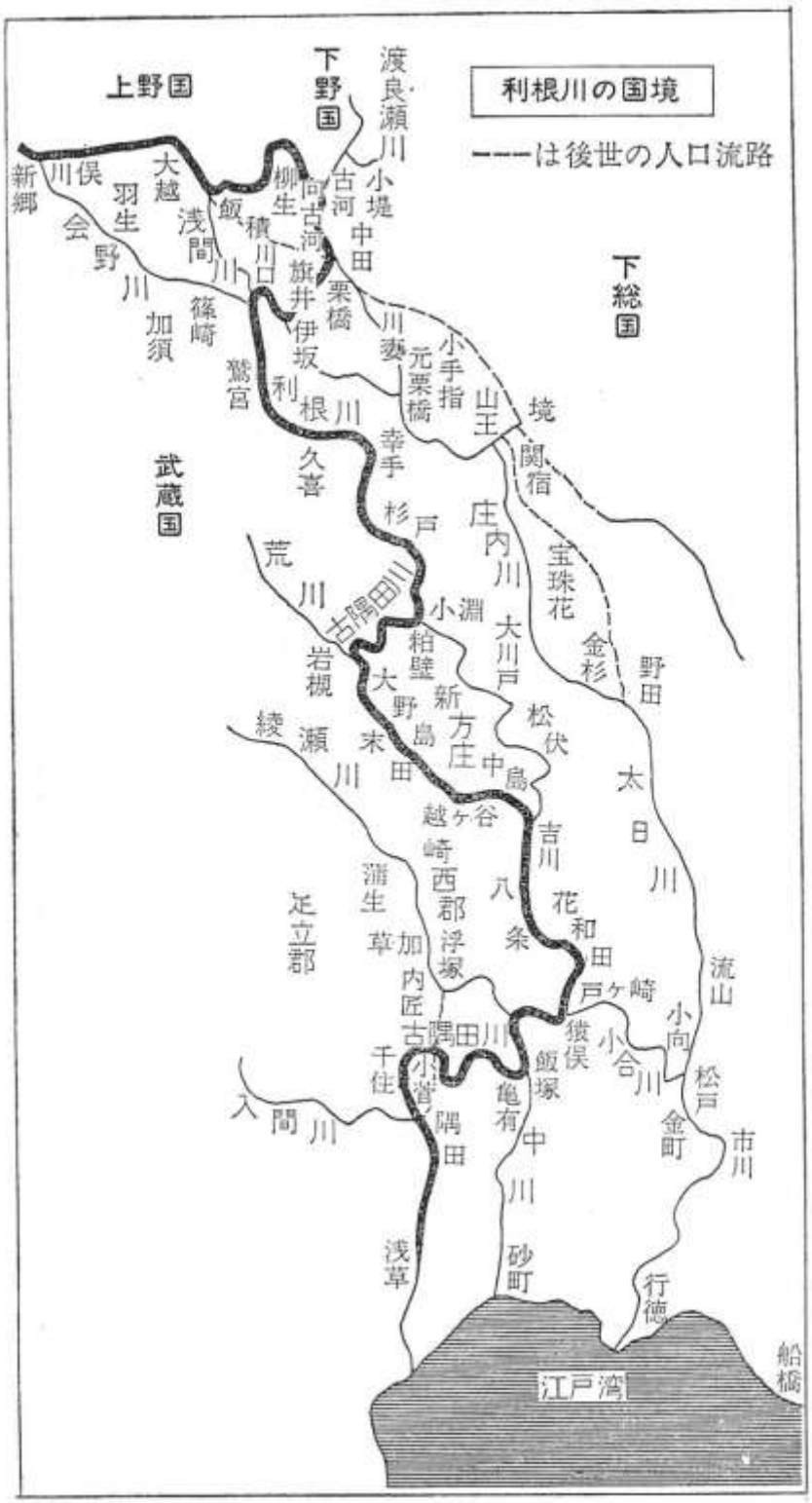
この神は「ミズハノメ神」であって、古事記には「弥津波能売神」と書き、日本書紀では「岡象女神」と書かれていて、伊装那岐・伊装那美二神の御子神で畏くも天照大神の御姉神に当らせられる。父母の神は、我大八洲国を造り給うた国土経営の神であって、あらゆる神徳を備えられているが、この中特に「水」に関する一切の御神徳を受けて居られるのが、この水神即ち、「ミズハノメ神」である。

この水神宮は前記の御祭神を奉祠し、新田開墾の初め土民が堤上に水神を勧請して水害を逸れん為祈願したものでありその創立は亨禄年間（約四四〇年前）であると思われる。

昭和五拾参年六月　　亀戸水神奉賛会」

古代の隅田川（利根川）

下図は、本間清利氏の「利根川」（埼玉新聞社）より抜粋した。



かつての隅田川（利根川）は、古利根川（春日部市）から古隅田川（春日部市）、元荒川（越谷市）、中川、古隅田川（足立区）、隅田川と流れていたと推定されている。

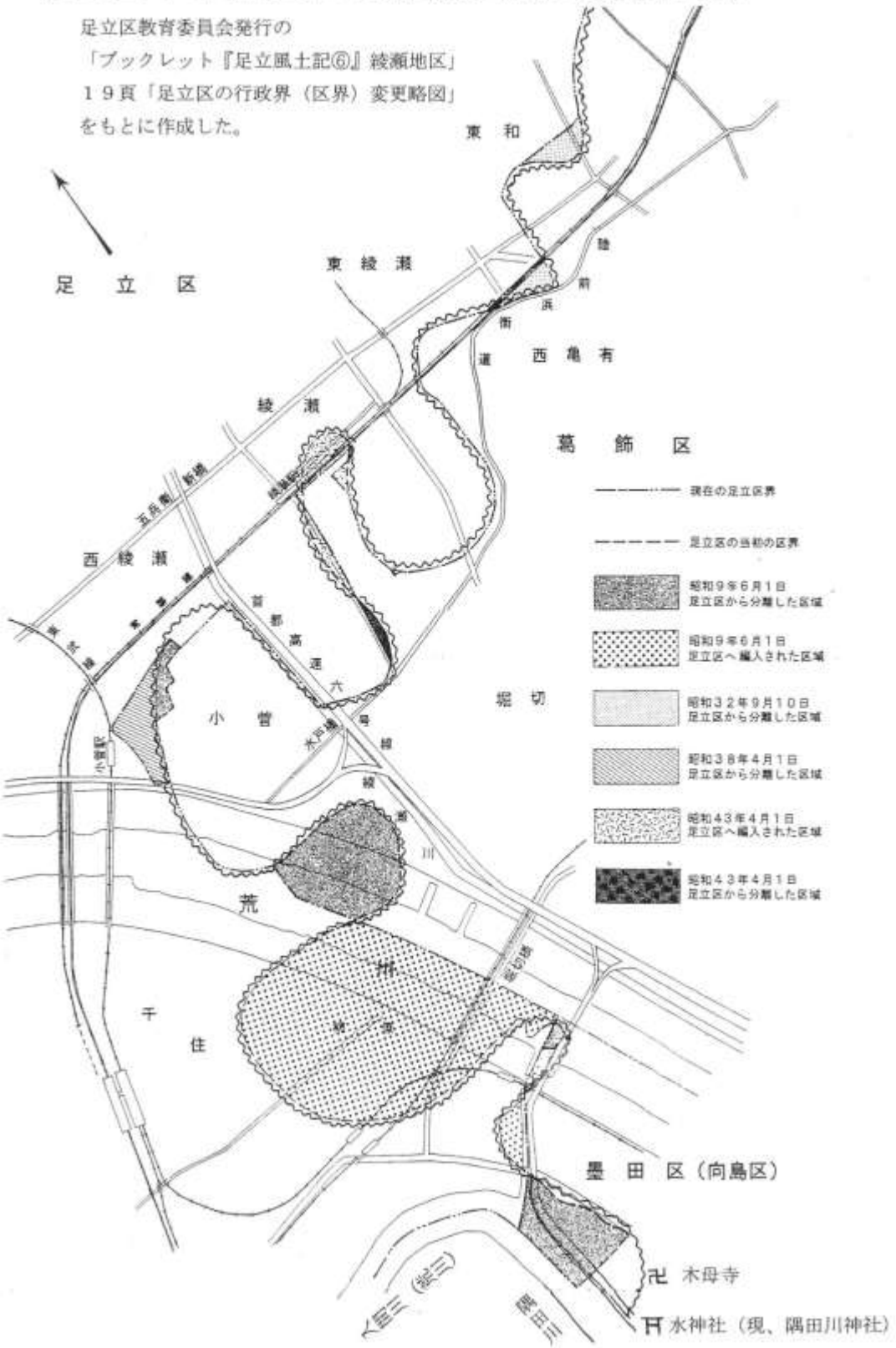
春日部市内の古隅田川（新方領古隅田川）

下図は、古代の隅田川の推定流路の一部としての春日部市内にある古隅田川（新方領の古隅田川）の流路図である。本間清利氏の「利根川」（埼玉新聞社）より抜粋した。

古代の利根川流路（新方庄古隅田川）

武蔵国埼玉郡太田庄に属していた地域は、古隅田川以北の豊春地区（花積、道口蛭田、上蛭田、下蛭田、道順川戸）と古隅田川以北の内牧地区であった。古隅田川以南の地域は、下総国葛飾郡下河辺庄の一部（後の新方庄）に属していた。

足立区内の古隅田川の推定流路（葛西領古隅田川）



古綾瀬川は、足立区と葛飾区の区界を流れ、足立区の柳原の西側に沿って流れ、木母寺と隅田川神社の北側で隅田川に流れ注いでいたと思われる。

江戸時代のお彼岸の行事

・江戸時代の越谷地域では、春と秋のお彼岸のころに一日かけて
「六阿弥陀めぐり」が盛んに行われていたと思われます。
・現代人の皆様、正月の「七福神めぐり」もよいですが、

「六阿弥陀めぐり」をやってみませんか。

そして、「越谷の六阿弥陀」を郷土の誇りにし、多くの人に知ってもらいましょう。
・昔ながらの徒歩では一日かかります（朝から夕方まで）。
現代人の便利な乗り物、自転車ですと、朝出て昼、
又は、昼出て夕で充分に済みます。
順路は下記の他に４→５→６→３（上赤）→２→１→３（登戸）、或いはその逆も可です。

越谷・六阿弥陀めぐり